

かなしみ色のうた

森咲尚輝

Morisaka
Naoki



グラフ社

森咲尚輝（もりさか なおき）

1966年生まれ。学生の頃より文学、精神世界に目覚める。大学卒業後教育関係の仕事を経て、本書がはじめての著作。趣味は星をながめること。現在大阪府在住。

この本に関するご意見ご感想は、書名をご記入の上、
gokansou@graphsha.jp までお寄せください。

かなしみ色のうた

著者＊森咲尚輝

発行者＊中尾是正

発行所＊株式会社グラフ社

〒150-0011 東京都渋谷区東1-26-26

電話・(03)3409-4610

振替・00120-5-55778

<http://www.graphsha.jp>

印刷所＊大日本印刷株式会社

万一乱丁落丁の場合はお取替えいたします

©Naoki Morisaka 2004, Printed in Japan

ISBN4-7662-0794-7 C0093

かなしみ色のうた

森咲尚輝

Morisaka

Norimasa

江苏工业学院图书馆
藏书章

この物語を、子供の中にある大人の心と、大人の中にある子供の心に捧げます。

人間の心が、自分の心も含めて、あらゆる差別がなくなるといふ最も困難な課題に立ち向かってゆけるよう、願いを込めて…。

目次

第一章 言葉 7

第二章 悲しみ虫 21

第三章 森の中できごと 33

第四章 好きな人 45

第五章 ナオの傷 77

第六章 出会い 99

第七章 メッセージ 117

第八章 続けること 131

第九章 痛み 139

第十章 手紙 157

第十一章 告白 183

できることと、できないこととて、人によつて違ひます。

できないことで悩んでいる人、なにができてなくて悩んでいるのでしょうか？

十歳さいになったナオの悩みは、勉強や運動ができないことではありませんでした。ナオは、ほかの人が平気ですが、自分にはできなくなつてしまつたという悩みを抱かかえています。それは、みんなが右を向いているときに、右を向けないというような悩みなのです。その日は突然とつぜんやつてきました。そんな悩みが、悲しみに変わる瞬間しゆんかんを知つてしまつた人と、まだ知らない人が、世の中にはいるのです。

第一章

——言葉——

一週間前、学校の宿題で『困っている人を助けよう』という課題が出されました。

ナオは、キンゾーという、クラスメイトでありながら、学校にはめつたに來ない子を助けようと思いつきました。隣の家となりに住んでいるということもあつたし、キンゾーを学校に來させることが、助けることだと思つたのです。

キンゾーとは、保育園のときには泥だらけになつて一緒に遊んでいましたが、小学校へ入つてからは、あいさつ程度しか言葉を交わさないようになっていました。ナオがキンゾーと最後に話したのは、四年生の学年が始まる四月の始業式でした。

キンゾーは、絵画コンクールで優勝したとかで、みんなの間で名の知られた存在でした。でも四年生になる少し前に、キンゾーのお父さんとお母さんがどこかへ行つてしまつたといううわさが街中に広まつてから、学校へはめつたに來なくなつたのです。

「キンゾーの家に近づいちゃだめよ」

近所のお母さんたちが、子供が外で遊ぶときに必ず注意する言葉でした。キンゾーの家からはニワトリの悪臭あくしゅうが漂ただよつていたことや、キンゾーが、目の見えないおじいさんとたつた二人で暮らしていることで、近所の人たちは、自分の子供と一緒に遊ばないようにと、警戒心けいかいしんを抱いだいていたのです。

キンゾーの家ではニワトリを飼つていて、卵たまごを売つて暮らしていました。そしていつも、

おじいさんが弾ひいている三味線しゃみせんの音がきこえてきます。おじいさんの目が見えなくなり、足も不自由になってからは、おじいさんがやっていた仕事を、ほとんどキンゾーがしていました。ナオの家の塀へいの穴からは、キンゾーの家の様子をのぞくことができ、ナオはときどき見ていたので、そのことを知っていたのでした。

「じいちゃん、きょうは卵、何個とれたか、数えてよ」

「おお、キンゾー、ありがてえ。ありがてえ。ひとつつ、ふたつ、みつ、よつつ」

キンゾーのおじいさんは、目が見えなくても、卵を一つひとつ手で触さわって、きょう産んだ数を数えるのです。ナオは、その様子を塀の穴からのぞいては、

『かわいそう』

と思うのでした。なにをかわいそうと感じるのか、ナオにもわかりません。ただ、なんとなく、そう感じるだけなのです。

「キンゾーや、キンゾーや。ごめんな。学校、行っておくれ。俺おれなんかにかまわねえで、な。な、キンゾー」

「なに言っただよ、じいちゃん。じいちゃん、卵触るの好きでしょ？ 俺だって、ニワトリ、大好きだし、じいちゃんも大好きなんだよ」

キンゾーとおじいさんの会話は、ときどきナオの家まで聞こえてきました。

クラスの間も近所の人、キンゾーの悪口しか言わなかったし、なんといつても、ナオ自身も、キンゾーの悪口を言つてはクラスの子と一緒に笑ひ合つていたので、今回の宿題で、キンゾーに近づくべきかどうか考えました。

『どうしよう…、でも、困つてる人を助けるつていう宿題なんだし…。これをやったら…。』そしてナオは、これから自分がすることを心に決めたのです。

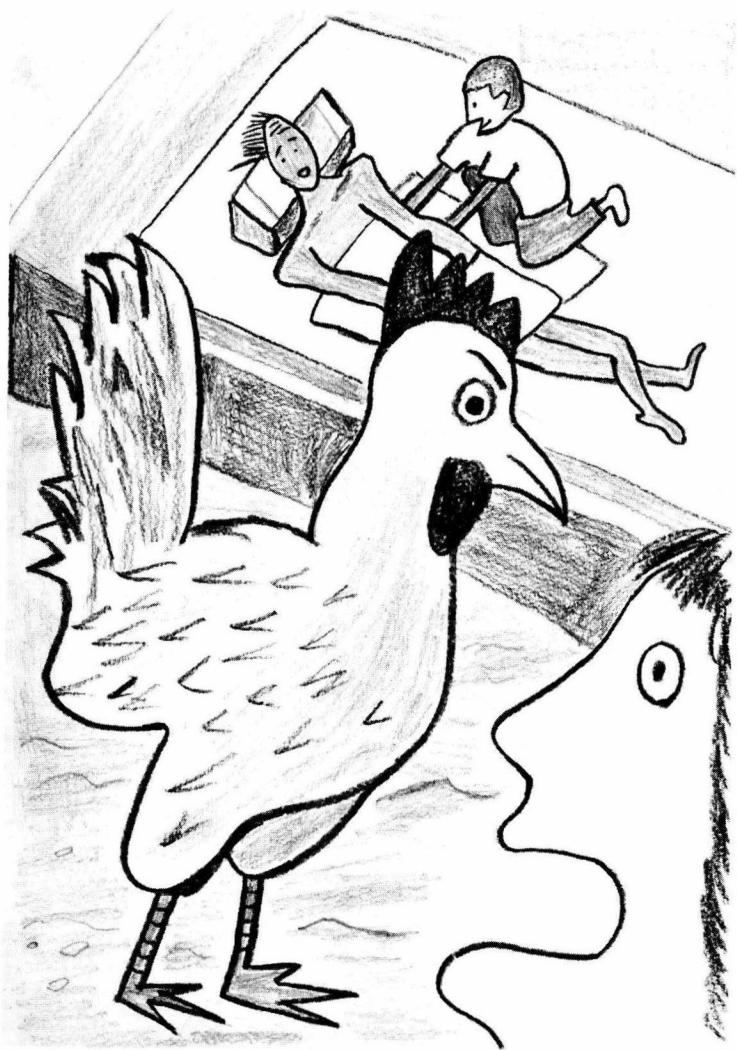
学校から帰ると、ナオは少し勇気を出して、キンゾーの家に行きました。鼻がまがるかと思うほどきついニワトリの匂い^{にお}がします。キンゾーは庭にいるようです。ナオは、せつかくわざわざ来てやったのに、と頬^ほを膨^ふらませながら庭へ回りました。

キンゾーは、ニワトリの世話をしており、縁側^{えんがわ}にはおじいさんが横^{よこ}になっています。キンゾーは、ニワトリの世話が終わると、おじいさんのおしめを替^かえはじめました。

「じいちゃん、もうすぐ、夕食だからな。今夜、なに食べたい？」

キンゾーは、おじいさんにやさしく話しかけていました。ナオは、その手際^{てぎざ}のよさに驚いて声も出せず、ただ見つめていました。近くで見るキンゾーからは、きつい匂いと一緒に、温かい体温を感じます。

ナオは、ふとわれに返り、キンゾーに話しかけました。



「キンゾー。ね、キンゾー、あしたから一緒に学校行こうよ。あたし、困ってる人を助けるっていう宿題があつてね、それで、来てあげたの。ね」

「ナオ、ありがとう」

ナオは、はっとしました。キンゾーの汗まみれの姿を見るほどに、自分のほうが醜いと感じずにはいられないなにかを感じたのです。キンゾーは続けました。

「ごめん。ナオ、せっかく来てくれたのに。君の役に立てそうにないな。俺の言うことって、話してもわからないと思うからさ、あした、手紙に書いて、ナオん家のポストに入れておくよ。だから、きょうは、ありがとう。ごめんね。役に立てなくて。毎日、学校行ってるんだよね、ナオは。俺、ほとんど行けないから。でも、俺なら大丈夫だよ。ナオもがんばってね。ありがとう」

意外にもやさしいキンゾーの態度と話し方に、ナオは驚き、自分がしていることが、なんだか恥ずかしいことのように思えてきました。

『まぶしい…』

キンゾーの汗と、日に焼けた黒い肌と、クラスの子より筋肉だらけの体、すべてがピカピカと夕日に輝いて見えました。

「あ…。う、う、うん。じゃあね」

ナオは、キンゾーに、自分の心が読まれているような気がして、必死で冷静を装よそおいました。心臓がドキドキして、足がぐくぐくしているのも感じました。震ふるえる足取りでキンゾーの家を出、ニワトリの匂においから遠ざかることができる、ナオはやっと少しほっとしました。

『ああ、なんだか、胸のあたりが、痛い……。少し……苦しい』

「ただいま」

家に帰ると、顔をゆがめているナオを見たお母さんが声をかけました。

「ナオ、なんだかびっくりしたような顔してるけど、大丈夫？」

「う、うん。お母さん、きょう、あたし食欲ないから、すぐベッドに入いって眠ねむっていい？」

「いいけど……ほんとに、どうしたの？」

「少し早いけど、きょうはおやすみなさい」

ナオはなにも考えたくなくて強く目を閉じ、いつもより四時間も早く眠りにつきました。

次の日の朝、ナオは、

『きのうのことなんて、きっとキンゾーは忘れてるよね、ううん、忘れてほしいような

気がする』

と思ひながら、ポストをのぞきました。すると、キンゾーからの手紙が入っていたのです。ナオはドキツとしました。

ナオは手紙を読んで、深く深く、自分が傷ついてゆくのを感じていました。激しくめまいがして、その場に立っていられないほどに心が震え、足が震えました。腰が抜けたような感覚でもありました。学校へ行かなければならないのに、言いようもないショックで、一歩も進めなくなつてしまいました。

「お母さん！ 助けて！ 苦しい！」

ナオは、巨大な石が心に落下してきたような衝撃に、耐えられなくなっていました。

「ナオ、どうしたの？ 顔色悪いじゃない」

ナオはその日、学校を休んでしまいました。

それから一週間、ナオは立ち上がる気力もなく、ずっとベッドの中にいました。心に感じた激しい衝撃など話せるはずもなく、お母さんと先生には熱があると嘘を言つて、目を閉じ続けていました。ナオは、もつともつと考えなければならぬ気がしてなりませんでした。目を閉じると深い闇が広がり、心の痛みとともに、今までの自分の姿が見えました。

「むかつく。むかつく。どけよ」

学校で強い自分をアピールしたくて、だれにでもそんな口をきいていた自分、勉強が大嫌いなのに、一〇〇点をとることに一番の快感を覚えていた自分、自分より弱いものを探しては満足していた自分、欲しい物はなんでも手に入れてきた自分が見えました。

『あー、しょーもねえなー。足りないんじゃない？ あ・た・ま』

そんなふうに思いながら、にやにや笑ってる自分、思いどおりにならないと泣きわめいている自分が見えました。それだけではありません。人の話なんて聞きたくもない自分。なんでも、人には自分の言うことを聞かせられるものだと思っている自分。だれかに勝っていることを確かめたくてしょうがなかった自分。まぶたの奥に見える自分は、数え上げたらきりがなく、たくさんさんの醜い自分でした。そんな自分が見えるほどに、心に、引きちぎられるかと思うほどの激しい痛みを感じました。

ナオは、自分が怖くなつて目を開きました。目を開くと、自分の姿は消えてゆくけれど、心の痛みは、どんどん激しく増していきました。一週間、ほとんど眠れず、今までの自分の姿にうなされ続け、もう二度と布団から出たくないと思いました。

「ちよつとナオ、いつまで寝ているの？ いい加減に起きなさい。きょうで一週間よ。仮病だつてわかつてんですからね。いい加減に学校行きなさい」